都倉文化庁長官 退任あいさつ
5年間振り返り「感謝しかない」

文化庁では3月27日、文化庁京都庁舎において、最後の京都庁舎出勤日を迎えた都倉俊一長官による退任あいさつが行われた。

都倉長官は令和3年4月の就任以降5年にわたり、コロナ禍における文化芸術活動の振興、文化庁の京都移転、CBX、文化庁と自治体・産業界との連携、食文化・文化観光の推進など、文化行政の充実・発展に尽力してきた。職員に向けた退任あいさつでは、これまでを振り返り、職員への感謝を述べた。その後行われたぶら下がり取材では、伊藤学司新文化庁長官へ「文化庁のテリトリーが増え、職員の皆さんにプレッシャーがのしかかっている。ぜひ組織改革を行っていただきたい」と期待を示したほか、京都生活を振り返って「さびしい限り。京都に来るときは『京都のいけずに気をつけろ』と言われたが、結論から言うと京都の愛に包まれて帰ることになる。私の人生において京都とのご縁ができたことは非常にうれしい」と述べた。

職員から花束を受け取り笑顔で退任する都倉長官（写真：文化庁提供）

都倉長官のあいさつ概要は次の通り。

「長くて短い、どちらかわからない5年間でした。コロナ禍真っただ中に就任して、いろんなハードルをくぐって、ようやく気がついた時には京都移転という大きな仕事をしなければならないということで、基本的には毎日毎日、一生懸命走ってきたつもりです。霞が関素人の私が、今日このように無事に退任を迎えられましたのは、何といっても職員の皆さまのご協力あってこそです。組織の長は初めての経験で、いろんなプロジェクトでいろんな人とお付き合いをしてきましたけど、人と人とがそれぞれの感情で、あるいは人情、情けで触れ合って、そして作っていく。こういう人と人の出会いがものを生んでいくんだと思いました。また、一人一人が仕事を一生懸命に責任をもって前に進めているんだという、それが合わさって、色々な難しい問題、一番大きな京都移転を成し遂げたのも、皆さんの努力あってのことで、その上に私は乗って今日まで来たわけです。

この5年間は本当に忘れ得ない貴重な経験で、退任するにあたって一言で申し上げるとするならば『感謝』。感謝しかございません。本当にありがとうございました」